

Wesley Hall News

ウェスレー・ホール・ニュース

No.140

December
2022

イザヤ書 第7章14節

見よ、おとめが身ごもって男の子を産み、
その名をインマヌエルと呼ぶ。



目印は飼い葉桶！

伊藤 悟
学院宗教部長



クリスマスの目印はキャンドルやイルミネーションではありません。ツリーやサンタでもなく、クリスマスディナーやプレゼントでもありません。

ルカ福音書は、飼い葉桶のなかに寝ている乳飲み子がしるしであると告げます。飼い葉桶とは馬や牛など家畜の餌箱のことです。そこに乳飲み子が寝かされている。それがクリスマスの目印です。サンタもディナーもキャンドルも、イルミネーションやプレゼントも、すべてこの飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を指し示すものです。現代社会は、しばしばその原点を忘れています。忙しさや慌ただしさ、不況や戦禍にあつて、クリスマスどころではないといった声も聞こえてきそうです。

最初のクリスマスが起こった時代。それは社会も人の心も暗闇にすっぽりと包まれていました。人々の間では絶え間ないいさかいや争いがあり、権力者たちは、それぞれが自分の思い通りに時代を操りたいと考え

天使は言った。「恐れるな。私は、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、産着にくるまって飼い葉桶に寝ている乳飲み子を見つける。これがあなたがたへのしるしである。」

ルカによる福音書 第2章 10-12節

色々の駆け引きがありました。また、さらに強大な権力が押し掛けて強者が弱者を食物にし、自分と異なる者は排除されていく。役に立たない者は社会の隅に追いやられる。暴力、貧困、差別、搾取、飢饉、飢餓、疫病、拷問、重税などなど。人々の上に暗黒がずっしりと垂れ込めていました。人々はそうした状況の中で、必死に計算します。どうしたら得なのか、どうしたら損をしないか、どうしたら生き延びることができるのか、自分の身を守ることができるのか、計算を始めます。

そうした状況は今日も何も変わりません。コロナ禍にあつても、戦争が起きて、不況が続く中でも、人々はどうしたらより得になるか、残念な自分にならないかを計算します。何から何まで私たちは計算しようとし、数字が飛び交い、ランキングが飛び交い、そうこうしているうちに、何のために数字をはじき出しているのかが分からなくなったりもします。

しかし、それは私たちの人生や社会を構築する上での唯一のあり方なのでしょうか。

計算や打算のない世界がある。真っ暗闇だけれど、暗黒の垂れ込める状況だけれど、その中に一つの光がある。それは神が送られた光であり、神の愛や平和はけっして計算や打算ではなかったことを示すものです。

その目印が「飼い葉桶に寝ている乳飲み子」だというのがクリスマスです。イエスの母マリアも色々な計算したかったけれど、旅の途中で急に産気づき、何の準備も整えることができませんでした。計算づくしで生きていた人たちからは排除され、宿屋の馬小屋に押し込まれるよりほかありませんでした。

闇の立ち込める時代や状況の只中にひっそりと産まれて飼い葉桶に寝かせられた乳飲み子。これが目印です。忙しさや慌ただしさや争いがあるなかにこそ、クリスマスが必要とされるのです。乳飲み子は計算しません。計算や打算で自分の寝る場所を決めたりはしません。計算や打算といった観点からすると、まったく無に等しいゼロの存在。それが「あなたがたへのしるしである」。ここから平和が始まる。ここに希望の光があるというのがクリスマスのメッセージです。

その知らせを聞きつけてやってきたのは、この世の権力や計算世界とは無縁の羊飼いたちでした。この社会のしきたりやルールや方程式とは無縁の世界からやってきた外国人たちでした。この乳飲み子こそが、この飼い葉桶こそが、クリスマスに決して忘れてはいけない私たちの原点、私たちの目印です。

どうぞみなさん、クリスマスの目印とその意味に深く触れてみる今年のクリスマスにしてください。世界の人たちが皆、よいクリスマスを迎えられるように。

笑顔で飼い葉桶を囲むことができますように。とくに戦禍で苦しんでいる人たちに平和の光が訪れますように。メリークリスマス！



幼稚園の園児たちによる

クリスマスの 手作りプレゼント

神さまが私たちに救い主イエス・キリストを与えてくださったクリスマス。

贈り物を持ってそのみどり児を拝みに行った東方の博士たち。

それらのことをおぼえ、子どもたちは小さな手を動かして、いちばん身近なお家の方にプレゼントを作って贈ります。



年少組：蜜蝋ろうそく



年長組：デコパージュランタン



年中組：一輪挿し

クリスマスを迎える喜び

皆さんはクリスマスをどのように迎えますか？
初等部・中等部・高等部の在校生と先生方に、クリスマスを迎える
いまの想いやクリスマスの思い出を綴っていただきました。

高等部

Senior High School

高等部教諭 樋口 玲子

今度はわたしたちが

子どもの頃、“クリスマス”が近づくと、サンタさんのプレゼントが楽しみでした。でももっと興味があったのは、サンタさんに会えるか？ ということです。イヴの夜、眠い目をこすって一生懸命起きていようと頑張るのですが、どうしてもどこかで眠ってしまい、「あー、今年も会えなかった……」ということは何年か繰り返しました。そしてある年、イヴの夜にサンタさんがおもちゃを買って帰ってくるところを目撃してしまいました。そのコソコソとした後ろ姿に心がとても温かくなったのを覚えています。

大人になって、今度は息子のほしい物をサンタさんをお願いするようになると、それがもっと幸せな気持ちへと変わりました。大好きな人のためにプレゼントを用意することほど、幸せなことはありません。

“クリスマス”は、大好きな私たちのために、神様がイエス様を送ってくださった日です。それには大きな痛みが伴いました。その愛と痛みをしっかりと受け止めて、私たちもまた誰かのために何かをささげることができたら……と思います。



高等部クリスマス礼拝

高等部

Senior High School

3年 櫻井 奏楽

なんか日曜サンタさんも

来るっぽいけどどうする？ やめとく？

最近は段々と肌寒くなってきて、クリスマスが近づいてくるのを実感させられます。しかし、あのサンタさんとして、あまねく全ての人に歓迎されるわけではありません。世の中にはクリスマスに拒否感を持っている人々が一定数存在していて、時にサンタさんはワインやクッキーどころか、罵声を浴びせられて追い返されてしまいます。それなのに、彼は毎年毎年やってきて、良い子の枕元にプレゼントを置いていってくれるのです。必要とされていないのにやってくる、というのにはなかなか強い精神が必要だろうと思います。

今でこそキリスト教は世界に浸透していますが、初めのうちは迫害を受け、石を投げられていました。きっとキリスト教にルーツを持つサンタさんにとっては、この程度の小石はいちいち腹を立てるほどのものでもないのでしょう。

僕はオルガン部の活動として、自ら楽曲を制作し、演奏をすることがあります。これも誰かに頼まれてやっているわけではなく、自主的に行っていることです。他人から求められなくても、自分がすべきことを探して実行する行動力こそが、周りの人々、そして自分自身にとって大切なことなのだと思います。



高等部PS講堂オルガン

中等部

Junior High School

3年 福岡 奈那香

助ける勇氣

私は中等部に入学するまで「クリスマス」に対して特別な思いはありませんでした。クリスマスには欲しい物が貰える、まるで自分の誕生日のような楽しい行事と捉えていました。しかし中等部でクリスマス礼拝を経験し、聖歌隊としてご奉仕したことで今までのクリスマスへのイメージが変わりました。

また、クリスマスはイエス・キリストに関係があることは知っていましたが、実際にイエスが何をしたのかは全く分かっていませんでした。しかし、聖書の授業や日々の礼拝を通してイエスがいかに弟子たちに信頼される偉大な方かを知ることができました。特に「善いサマリア人のたとえ」(ルカによる福音書 10:25-37)のように、困っている人がいれば誰にでも手を差し伸べることが大事だという教えに感銘を受けました。

コロナへの不安がなくなる今この世の中で本来のクリスマス礼拝を経験することは難しいと思いますが、これからの未来に経験できる機会を楽しみにし、また日々の生活の中で困っている人を見掛けたら勇氣を持って声を掛け、助けになれるよう行動できる人になりたいと思います。



中等部礼拝堂にて

中等部

Junior High School

3年 日野 翔太

アドベントクランツ

アドベントクランツに火が灯るとクリスマスの準備が始まります。アドベントクランツとは四本のろうそくから成っており、一つ一つのろうそくに意味があります。

一本目は「希望」、二本目は「平和」、三本目は「喜び」、四本目は「愛」となっています。一本目と二本目の意味をこの中等部に入ってからより深く考えるようになりました。

僕達はコロナの影響で入学式が六月に遅れ、友達と会えず、家で一人で課題を進めていました。マスクは当たり前となり、不要不急の外出を避けるという状況で世の中の人すべてが「希望」を見つけれずにいたと思います。

二本目の「平和」で思い出すことは「クリスマス休戦」という実話です。第一次世界大戦の中、イギリス・フランス・ドイツがクリスマスの日に一時的に停戦をしました。この話を聞き、クリスマスには平和をもたらす力があるのだと分かりました。

今なお世界で続いている争いが一刻も早く終わり、クリスマスのろうそくにもある通り希望を捨てず、世界中に平和が訪れることを祈りながら今年のクリスマスを待ちたいと思います。



中等部礼拝堂にて

初等部

Elementary School



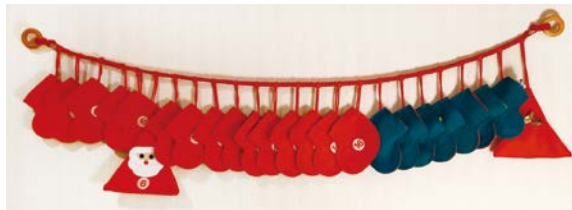
6年 池上 奏

わたしのクリスマス

わたしのクリスマスは、靴下のアドベントカレンダーから始まります。このアドベントカレンダーは、私の祖父がウィーンの音楽家の友人からいただいたもので、母が子どもの頃から飾っている大切なものです。毎朝、起きてすぐにアドベントカレンダーを一枚めくると、緑色の靴下が赤色に変わり一日ずつクリスマスに近づいていくようでとってもわくわくします。

クリスマスの週の日曜日には、教会でページェントを行います。幼稚園生から高校生までが一つになって演じます。

そして私がいちばん好きな12月24日のクリスマスイブ。夕方教会に集まると、会堂の電気を消し、一人一人がろうそくを持って聖書の御言葉を聞き、讃美歌を賛美します。コロナ禍になる前には、礼拝後にキャロリングに出かけていました。ろうそくをもって近くに住んでいる教会員の方々のおうちを回り、讃美歌を歌うのです。そして、クリスマスの訪れを伝えるのです。日本には、クリスマスの本当の意味を知らない人がたくさんいます。そんな中で、私は本当の意味を知り、イエス様の誕生を心からお祝いできることに感謝したいです。



初等部

Elementary School



初等部教諭 柚村 満

クリスマスの思い出

私は、アメリカ合衆国ミシガン州アナーバーにある美しい雪景色が見える家で家族とクリスマスを迎えることが多かったです。リビングには暖かい薪が燃える暖炉があり、大きなクリスマスツリーの周りには親戚、友人から届いたクリスマスカードと贈り物が置かれていました。家の中では、アメリカの家族がピアノやバイオリンでクリスマスの演奏をしてくれ、イエス様の誕生を嬉しく思い、心に平安が溢れました。イブの日は、夕食を済ませて、教会でクリスマスイブの礼拝を守り、聖書の御言葉とクリスマスのメッセージを聴いて、心に大きな喜びを持って家路につきました。クリスマスの朝は、アメリカの家族が毎年 Eggs Benedict という料理を作ってくれました。

私の家族もアメリカの家族もクリスチャンファミリーで、クリスマスの日も家族8人で輪になり手をつないで、一人一人が神への感謝と願いを祈りました。アメリカでのクリスマスの思い出は家族の生涯の宝となり、神様に感謝でいっぱいです。



2003年ミシガン州アナーバーにあるバード家の庭で

クリスマスに おすすめ の作品!

みなさんはアドベントの期間をどのように過ごしますか?
各部の方々に、この時期におすすめの作品を紹介していただきました。

DVD

高等部教諭
中久木 眞治



『クリスマス街道 欧州3
国・映像と音楽の旅』
製作:シンフォレスト

クリスマス、という出来事をあまり世俗的にとらえてはいけない……とは思いますが、この「愛する人と過ごす日」「ケーキを食べる日」「サンタさんが来る日」としての認識ばかりの日本で（それでも祝わないよりましかもしれないが）、圧倒的かつディープに、本来のクリスマスの雰囲気に浸りたい方に超絶お勧めのDVDである。

内容は、ヨーロッパの教会や、イルミネーションに彩られた夜のクリスマスマーケットの紹介であるが、それらは概ねキリスト教の（プロテスタントの）伝統が最も現代でも大切にされている、ドイツ、オーストリア、それにドイツ的な文化も共存させてきたフランス・アルザス地方のキリスト教のイベント紹介の数々である。

映像だけでも十分クリスマスの雰囲気に浸れるが、それに勝るとも劣らないのがBGM（と呼ぶにはあまりに本格的な背景音乐）である。例えばオーストラリアのオーベルンドルフにおいては、「G線上のアリア」というバッハの有名曲のほかに、この地方で生まれたグルーバー作曲の「きよしこの夜」誕生秘話が語られる……といったセンスの良さを見せている。

全部で9か所のクリスマスがその地域で最も著名な教会堂も含め収められているが、おすすめは「世界最大のアドヴェント・カレンダー」という題の付いたドイツ・ゲンゲンバッハのクリスマスである。

同様のものが何種類が発売されており、どれもお勧めで素晴らしいが、映像も音楽も最も正統的なヨーロッパのドイツ風クリスマスを鑑賞したいのであれば、まずはこの一枚をご覧いただければ幸いです。

書籍

総合文化政策学部2年
寺岡優季



『光を仰いで クリスマスを
待ち望む25のメッセージ』
朝岡勝／いのちのこば社

「クリスマスは、神の愛のこの上ない現れです。」

現代を生きる私たちには苦しい試練の時が多くあります。コロナによって思い描いていた未来が叶わなくなったり、なかなか答えの出ない問題に苦しみすべてを投げ出したくなったりする時があります。しかし、クリスマスに友達や家族とプレゼントを交換したりするように、私は神様から愛という希望をプレゼントされていたということに、この本を読んで立ち返ることができました。

私の目に見えるものは変わったとしても、神様の愛は変わりません。だから神様がくださった愛を信じて生きていく道を選ぶのだと強く思いました。

クリスマスとはそもそも何なのか、神様が私たちに与えてくださった希望とは何なのか。みなさんにも、朝岡先生が語る25のメッセージから受け取っていただきたいです。

クリスマス絵本の多くは心に沁み入る静かなものだと思いますが、この絵本は、降誕の場面を珍しくユーモラスに描きながら、最後にクリスマスの意味がじわりと伝わってくるような内容になっています。

主人公は宿屋の主人です。可愛らしいイラストで描かれたさまざまな登場人物が、宿屋の主人を通して、それぞれに降誕の場面を表現していきます。クリスマスの夜、イエスさまがお生まれになる場面もシンプルに喜びが伝わってきます。読み手のわたしたちも、クリスマスの喜びを多くの人に伝えたいような気持ちになるのです。降誕物語をご存じの方には、クスッと笑いながらホッと心に残る1冊になるのではないのでしょうか。

コロナウイルスや戦争による不安や悲しみが世界中に広がっている時だからこそ、神様が人となって来てくださったクリスマスを心から待ち望みたいと思います。

絵本

幼稚園教諭
西脇京子



『せいなるよるはおおさわぎ』
ニコラス・アラン／ドン・ボスコ社

CD

コミュニティ
人間科学部准教授
輪島達郎



『クリスマス協奏曲集』
演奏:カペラ・ガベッタ

神がひとり子の誕生を告げるために選んだのは、貧しい野宿者である羊飼いたちだった。彼らこそが、歴史上はじめてクリスマス祝ったのである。

17世紀、草創期の近代音楽の中心イタリアではクリスマス音楽も盛んに作られたが、そこにつきものだったのが「パストラーレ」(牧歌)で、羊飼いたちがバグパイプと葦笛で奏でた文字通り牧歌的で平和な音楽である。「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(ルカによる福音書 2章20節)とあるように、彼らは喜びの牧歌を奏でながら帰ったことであろう。「パストラーレ」には羊飼いたちの素朴な喜びと、救い主の誕生を祝い、神の平安を願う祈りが込められている。

このCDには、有名なコレッリの「クリスマス協奏曲」をはじめ、「パストラーレ」を含むイタリアン・バロックの名曲が収められている。古楽アンサンブルのカペラ・ガベッタの演奏は古楽の常識を覆すダイナミックなものだ。

ある冬晴れの朝、淹れたての珈琲の香りが漂う暖かいリビングから、クリスマスソングを弾くピアノの音色が聞こえてきた。鍵盤の前に座る母の横顔は幸せそうで、こちらもなんだか心弾む気分になったのを覚えている。

このクリスマスソングブックは、私が生まれる前から家にあったそうだ。母に、「なぜこの本を選んだの?」と尋ねたら、「家族みんなで歌いたかったから」とのことだった。プレゼントの包装紙を彷彿とさせる、赤い表紙が印象的なこのソングブックの特徴は、楽譜に加えて、日本語と英語の歌詞が収録されていることだ。思わず顔がほころんでしまうような、パステルカラーの優しい挿絵もクリスマスを伝えてくれる。家族とのクリスマスの思い出を紡いでくれたソングブック。一人でも多くの人に喜びの歌が届きますように。

書籍

経営学部
マーケティング学科2年
浮田 貴久乃



『クリスマスソングブック』
児島なおみ/リポート

書籍

初等部教諭
田中和美



『小学生のための 聖書がまるごとわかる本』
すずき たかひろ 文/たさき ゆきこ 絵/いのちのことば社

クリスマスが近づくと、主の降誕を覚えて、聖書にもっと向き合いたいという気持ちが湧いてくる人もいるのではないのでしょうか。私もそのひとりで、与えられた主題聖句を受け止めるだけではなく、聖書の通読に挑戦したいという気持ちになります。そんな気持ちに添えてくれるのが、『小学生のための聖書がまるごとわかる本』です。

この本は、旧約聖書が低学年向けに、新約聖書の福音書が中学年向けに、使徒書が高学年向けに書かれていますが、総ルビでイラスト付きなので、どの学年でも読むことができます。また、用語や背景を学ぶことができ、お話の意味を深く理解することができます。完読すると、出来事のつながりを感じながら聖書に親しむことができるのもこの本の魅力です。小学生だけではなくおとなにも手にとることをおすすめしたい1冊です。

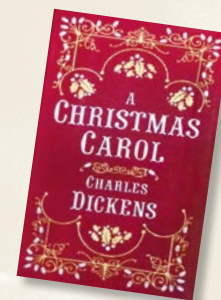
Every year during the Christmas season, I have my own personal tradition of reading *A Christmas Carol* by Charles Dickens. It is a story about an old man named Ebenezer Scrooge, who is selfish and unfriendly. After being visited by several ghosts who allow him to examine his past, present, and future, he begins to change his outlook on life and on Christmas.

Even though the story was published in 1843, its message is still relevant to the present day. Like Scrooge, we lose sight of, or maybe even turn our backs to the important things, like kindness, generosity, and hope. We forget about the true meaning of Christmas: rejoicing in the birth of our savior, Jesus Christ by having an open and giving heart, just as he did. Reading the story each year reminds me to focus on what the holiday is truly about and the importance of healing and renewed strength during the Christmas season.

I hope you will take the time to check out this book and like Scrooge promises, to “honor Christmas” in your heart and “try to keep it all the year” by living in the past, present, and future.

小説

中部部教諭
Gabrielle
Gutierrez



A Christmas Carol
by Charles Dickens

キリスト教の実践と人道支援 ― ウクライナ難民受け入れの一例

ウクライナ難民支援の活動をしている、
ポーランド出身のメルクレイン先生にお話を伺いました。
今なお戦火の続くウクライナの人々を覚えて、私たちもお祈りしましょう。

総合文化政策学部 文化創造マネジメント研究科教授

メルクレイン・イヴォナ [ポーランド・ワルシャワ出身]



私が担当している国際比較文化論という研究科授業に、時々社会人の方々も参加しています。豊富な実務経験をしている人、様々な文化活動、社会活動をしてきた面白い人に出会うことがあります。何人が印象に残っていますが、AAR Japan（難民を助ける会）の会長、吹浦房子さんは確かにその1人です。1970年代のインドシナ難民の時代から難民支援活動を続けてきた方で、その報告を研究課題としてまとめようと文化創造マネジメント研究科に入学しました。私は授業時に戦後日本におけるポーランド人宣教師の慈善活動を始めとして、日本とポーランドを結んだ人道支援の歴史を紹介したりします。そうすると吹浦さんは「はいはい」と頷きながら、その事実が未だに記憶に新しいような雰囲気です。私が歴史研究として記録してきた慈善活動、人道支援は実践者の吹浦さんから見れば長年やってきた、日常的な仕事の一端でした。AAR Japan は特定の宗教に関係ないNGOですが、違う看板でもキリスト教的な隣人愛をあれだけ実践してきた方が現代日本ににいるという、印象深い出会いになりました。

吹浦さんが卒業してからしばらくの2021年のことですが、私は特別研究休暇を得てポーランドへ子連れで一時帰国し、ワルシャワ郊外にある汚れなき聖母修道女会学校附属幼稚園に子どもを預けました。限られた時間でもポーランド語とポーランド文化と共に、キリスト教を集中的に学ぶ機会を得ました。子どもはチャペルも園庭もある環境に恵まれた学校で、シスターの温かい指導を受け毎日お祈りしたり遊んだり勉強したりし、私はワルシャワ大学に籍を置き研究をする毎を送りました。

ウクライナに発送される物資の準備、
2022年3月2日。汚れなき聖母修道女
会のポーランド・ワルシャワ学校法人提供。



た。そしてあの当時、息子がお世話になった汚れなき聖母修道女会が、戦前はポーランド領、現在はウクライナのテルモピリ州ヤズウォヴィエツで創設され、現在もその修道院の運営を続けていて、ウクライナと長く深い関係があることを知ってはいましたが、あまり意識していませんでした。

2022年2月上旬に日本に戻ってきましたが、その下旬に周知の通り、ロシアがウクライナに侵攻しました。その後数日で、隣国のポーランドに渡る戦争難民が100万人単位にのぼることが予想されました。つまり、今回の戦争は第二次世界大戦後最大の難民危機につながる、とのこと。そのニュースで心を痛めた私に、ほぼ同時に二通の連絡が届きました。一本目のメールは息子がワルシャワで通っていた学校の PTA メーリスからの手紙 ― 汚れなき聖母修道女会学校校舎が緊急避難所になり、ウクライナ難民親子が30組ほど滞在しているので物資支援をください ― という依頼でした。なお、ウクライナ・テルモピリ州の修道院にも国内難民親子30組程が身を寄せ、その援助も求められています。それとほぼ同時に、久しぶりに吹浦さんからの連絡。すでに16カ国で活動している AAR Japan ですが、中東欧に入るのは初めてなので、現地で人道支援受け入れができる組織・団体と繋げる相談のためでした。私はさっそく息子が通った学校とその経営している修道女会を紹介。その結果、戦争勃発半年後もポーランド・ウクライナの両修道院に駆け込んだ難民家族への日本からの温かい支援が続いています（詳細は AAR Japan の活動報告が随時更新されている同団体のウェブサイト <https://aarjapan.gr.jp/emergency/2022ukraine/> を参照）。日本の NGO とポーランドの汚れなき聖母修道女会とウクライナ難民を、私を用い繋げてくださった神様に感謝です。

ありがとう、さようなら、 ウェスレー・ホール

ウェスレー・ホールは、いまから54年前の1968年に建てられました。皆さんが手にしてい



1968年竣工当時のウェスレー・ホール

る『Wesley Hall News』は、その4年前の1964年に創刊されました。共に青山学院の創立90周年の記念事業として行われたものです。どちらにもウェスレー (Wesley) の名前が付いていますが、これは青山学院の創立の源流であるメソジスト教会を始めた John Wesley [1703-1791] を記念し、彼の信仰を受け継ぐことを決意したものです。アメリカの各地にあるメソジスト教会に集う人々は、日本にある青山学院という学校がキリスト教教育のために建物を必要としていることを知ると、たくさんの献金をしてくださいました。たくさんの人のお祈りと献金によってウェスレー・ホールは建てられたのです。そのおかげでウェスレー・ホールでは、たくさんのお祈り会や聖書の学び会、美術展、ミニコンサートなどの活動が行われました。

このたび大学の新図書館が建設されることから、ウェスレー・ホールは2022年度をもって取り壊されることになりました。とてもさびしいですが、たくさんのお祈りと献金がありウェスレー・ホールが建てられたこと、そしてたくさんの活動がここで行われてきたことを忘れたくありません。

『Wesley Hall News』は、これからも青山学院が受け継いできた信仰の遺産と建学の精神を多くの人に伝えて行きます。ありがとう、さようなら、ウェスレー・ホール。



編集後記

ウェスレー・ホール・ニュースを新しいデザインで皆様にお届けいたします。ウェスレー・ホール・ニュースは1964年に創刊号が発行されてから、一時休刊したときも含めて58年経ちます。1984年から新たに第1号が発行され、100号になってから画期的なデザインへ変更をしました。今回、140号を記念して、新しい冊子のデザインにいたしました。新しくしても、オール青山の一体感を失わないように工夫しました。各部の特徴もよく表せるように、おすすめの作品も学生・教員それぞれの目線で紹介していただきました。今回、特に読んでいただきたい記事の一つとして、メルクレイン・イヴォナ先生に「キリスト教の実践と人道支援」を寄稿していただきました。青山学院に日本のNGOと汚れなき聖母修道女会を通したウクライナ難民支援に関わっておられる先生がおられることをぜひお覚えください。執筆してくださった皆様に心から感謝申し上げます。お一人お一人の上にクリスマスの良き訪れがありますように祝福をお祈りしています。

大学宗教主任 森島 豊

Wesley Hall News 第140号

2022年12月7日発行

発行 青山学院宗教センター
学院宗教部長 伊藤 悟
編集 青山学院 Wesley Hall News 編集委員会
〒150-8366
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL 03-3409-6537 FAX 03-3409-8865
URL <http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
MAIL agcac@aoyamagakuin.jp みなさんの感想をお聞かせください

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(マタイによる福音書 第5章 13-16節より)